

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	瀧田 結香
		職 位 ・ 学 位	氏 名 印
論文審査担当者	主 査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授・博士(看護学)	野末 聖香
	副 査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 准教授・博士(看護学)	大坂 和可子
	副 査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 准教授・博士(工学)	佐藤 泰憲
	副 査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授・看護学博士	武田 祐子
(論文審査の要旨)			
<p>瀧田結香君が提出した学位請求論文「肺高血圧症患者における精神状態・QOL および関連因子に関する研究」は、稀少疾患で先行研究が極めて少ない肺高血圧症 (PH) 患者の精神状態およびQOL の実態と関連因子を明らかにした研究である。難治性疾患であった肺高血圧症の治療は近年著しく発展したが、治療薬の副作用や複雑な生活自己管理などにより、依然うつ・不安状態やQOL 低下が引き起こされやすい状況にあり、その実態を明らかにし、必要な看護支援について検討した。本学位請求論文は、2つの研究から構成される。</p> <p>調査対象は1大学病院に通院中の肺動脈性肺高血圧症 (PAH) 25名および慢性血栓塞栓性肺高血圧症 (CTEPH) 患者49名の計74名である。調査内容は、PHQ-9(うつ)、GAD-7(不安)、FACIT-Sp(スピリチュアル側面を含む慢性疾患特異的QOL)、SF-12(包括的QOL)を用いた質問紙調査および精神疾患簡易構造化面接(M.I.N.I.)、精神的苦痛体験に対する半構成的インタビュー、電子カルテからのデータ(血行動態、治療状況、重症度)である。</p> <p>「分析1」では、うつ・不安症状の有症率やうつ・不安症状を有する患者の精神的苦痛体験を明らかにすることを目的とし、Mixed Method Study(説明的順次デザイン)を行っている。質問紙調査の結果、全体の44.6%にうつ症状がみられ、うち17.6%は中等度以上であり、重症度や在宅酸素療法(HOT)の使用、治療内容、痛みや嘔気などの副作用が影響していたことなどを明らかにした。また中等度以上のうつ症状がある13名を対象にインタビュー調査を行い、精神的苦痛の要素として、PAH・CTEPHとも【これまでの自分の喪失】【周囲からの孤立感】【在宅酸素療法(HOT)による煩わしさ】【病気の進行・悪化に対する脅威】の4テーマを、PAH特有のテーマとして【副作用の苦しみ】を、CTEPH特有のテーマとして【息苦しさによる病気の反芻】を抽出した。これらの分析結果から、発症・診断時期にある患者や副作用を抱えるPAH患者およびHOT使用中やパルーン肺動脈形成術(BPA)未実施のCTEPH患者への支援の必要性を示した。この研究の成果はBMJ Open Respiratory Reserch. 2021;8:e000876. doi:10.1136/bmjresp-2021-000876に掲載された(関連著作参照)。</p> <p>「分析2」では、スピリチュアルな側面を含む健康関連QOLとその関連因子を明らかにすることを目的とした横断研究を行っている。包括的QOLは、先行研究と同様に身体的側面の身体機能(PF)、役割機能(身体RP)、精神的側面の活力(VT)が低く、慢性疾患特異的QOLにおいては、PAH・CTEPHともに社会面(SWB)のQOLががん患者よりも低かった。スピリチュアルウェルビーイングは、心不全患者や成人がん患者に比べて低く、身体的側面のQOLに関連する因子として、重症度やうつ、不安を抽出した。PAHでは痛みや嘔気といった副作用が、CTEPHでは肺高血圧症・心不全(PH・HF)症状が強く関わっており、QOL向上のためには薬物療法の副作用緩和やPH・HF症状の緩和が重要であると考察している。また、BPA実施群では身体的側面のQOLと慢性疾患特異的QOLが有意に高く、BPAが身体面のQOL向上に寄与していると考えられたが、精神的社会的QOLに差がみられなかったことから、BPAにより血行動態が著明に改善しても、PH・HF症状の残存を自覚している場合には精神・機能・</p>			

社会的QOLは向上しない可能性が考えられ、支援の必要性があると考察している。

「総括」では、治療が急速に進歩し予後が改善されても、PH全体、特にPAH患者はうつ症状の有症率が高く（分析1）、QOLは依然低い部分が存在していること（分析2）、Mixed Method Studyで明らかにしたうつ症状を抱える患者の苦痛体験にもとづき、精神的苦痛に対して、現在の生活や副作用、症状に対する捉え方・向き合い方（認知）に対するアプローチ、病気の反芻などに対するメタ認知の促進、病状の悪化予防や副作用マネジメントの支援を行っていく必要性を示している。

審査における主な質疑内容、指摘点、助言は以下の通りである。

1) 対象者の選定について

・研究目的に照らすと文献レビューや対象者の選択基準に最新治療を受けていることを含む必要があったのではないかと質問があり、稀少疾患で対象者が少ないことと新しい治療法ができ希望が持てる状況になったことから、最新治療を受けていない患者も対象に含めたことが説明された。また難治性稀少疾患である肺高血圧症の患者を対象にした理由や研究動機について質問があり、自身の臨床疑問から研究へつながった経緯が説明され、その内容を論文にも明記するとよかったとの助言があった。

2) 分析1の調査内容、分析・結果・考察について

・面接で精神障害の診断者数等が示されているが、不安障害やパニック障害の症状は肺高血圧症の症状と重なるため、精神障害ではない人たちが含まれていないかとの問いに、精神科医による確認で診断の精度を上げるよう努めたが限界があることが回答された。

・病態も疫学も治療も違うとしたPAHとCTEPHの血行動態などを群間比較することの意味について問われ、肺血管自体に病変があることは共通しているためであると回答された。

・調査対象はうつ症状を有する集団で、BPA治療未実施者がほとんどである。苦痛を抱えている人たちを対象者にした調査の結果をもって、治療が進歩しても精神状態が改善しない、と結論づけるのは論理が飛躍していないかとの質問があった。これに対し、対象者全員に苦痛の有無を調査しているが、対象者の多くが新治療未実施者であったことは限界であるとの回答がなされた。

・BPA治療に対する満足度のギャップ、サブテーマの違いはなぜ生じると考えられるか、の問いに、期待の高さや事前情報の内容の影響もあったのではないかと、本人の実感を確認することも必要であるとの回答があった。

3) 分析2の調査内容、分析・結果・考察について

・スピリチュアルウェルビーイングが低下しているとはどういう状態か、スピリチュアルウェルビーイングに対して看護師として何ができるのか、の問いに対し、スピリチュアルウェルビーイングとは人生観をしっかりと持っている状態と定義でき、何もかも駄目、何もかも無くなったという認知の偏り、捉え方を変える支援が必要ではないかと回答された。

・QOLが著しく低い人はどういう人なのか、を示す必要がある。疾患特異性のある尺度を使っているが、今後QOL研究をどのように進めたいか、の問いに、現在よく使われている尺度emPHasisは、副作用を十分反映しないと考えられるので、副作用も測れる尺度開発を目指したいと回答された。

4) 論文の全体的な構成や結果のまとめ方について

・文献レビューと調査の前後関係がわかりづらく、考察で文献レビューに関する検討がなされていない、という指摘に対し、文献レビューの一部は追加的に実施した経緯が説明され、研究の流れに沿って記述する方がわかりやすいという助言があった。

・分析結果のまとめ方について、有意差あった評価項目を中心に考察しているが、被験者数が極端に少ないグループで群間比較することは意味がなく、また変数間の相関についても、相関係数の検定で有意差があったとしても相関係数が低い場合もあり、それが何を意味しているのかを考える必要がある、という指摘があった。また患者の経済的損失などもあるはずなので、今後の検討としてQOLと医療経済評価を実施するとよいのではないかと助言があった。

論文審査の要旨

No.

以上の質疑において、いずれの質問に対しても申請者の考えや課題について明確に回答し、今後の研究についても明確にビジョンを語る事ができていた。審査委員からは、分析2において有意差に焦点を当てた分析だけでなく、丁寧にデータを確認し、看護の視点を生かして分析を深めること、今後投稿論文にする場合、結果のまとめ方や表の書き方について審査委員会の中で注意事項があったので、適切に修正し公表すること、などの助言があった。

本研究では、肺高血圧症の患者の精神状態、QOLに関する詳細な文献レビューを行い、Mixed Method Studyで実態調査およびインタビュー調査を行って、量的質的に分析を深めている。その結果、BPA等の新しい治療により患者の身体面のQOLは上がったが、精神面のQOLは必ずしも上がっていない実態と課題を明らかにしており、博士論文としての価値は高い。これらは申請者が本博士研究の過程で、肺高血圧症患者への看護ケアに関わり、臨床現場を知る中で得られた貴重な示唆でもある。

以上から審査担当者は全員一致して、本学位申請論文をもって瀧田結香君に博士(看護学)の学位を授与することが適当であると判断した。